熊本城解体新書 その3

天守閣下石垣復旧に伴う調査成果
大天守石垣 編

◇大天守石垣復旧の過程

① 大天守石垣上面発掘調査
石垣の解体範囲を調査し記録します。

② 石垣墨打ち・番付作業
元位置に積み直すために隣り合う石材に印を付けます。

③ 石垣解体作業（築石）
大天守穴蔵内部は狭く、解体作業は難航しました。

④ 裏込め清掃作業
解体途中で清掃作業を行ない、石の積み方等を記録します。

⑤ 築石石材調査
石材の大きさ、加工の特徴、損傷などを調査します。

⑥ 築石新補石材加工作業 ※新材確保地は調査に基づき厳選。
損傷がひどく、再利用できない石を新材で補います。

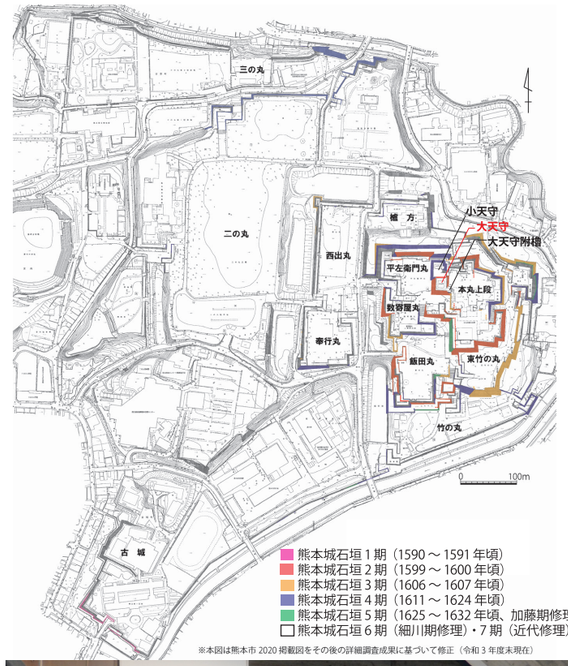
⑦ 積み直し作業（裏込め）
裏込めもすべて手作業で施工します。

⑧ 積み直し作業（築石）
解体前の写真等を参考に築石を積み上げます。

特別史跡（とくべつしせき） 熊本城跡（くまもとじょうあと）

所　在　地：熊本市中央区本丸 外
指　定　日：昭和 8 年（1933）2 月 28 日 史蹟指定
　　昭和 30 年（1955）12 月 29 日 特別史跡指定
　　令和 元 年（2019）10 月 16 日 最新追加指定
指 定 面 積: 約 57.8ha（旧城域面積：約 98ha）
石 垣 面 数: 973 面（平成 28 年現在）
石 垣 立 面 :79033.12 ㎡（平成 28 年現在）
石垣時期区分：7 期に大別 + 文化財修復石垣

（熊本市 2020「第 7 章付論 第 1 節 熊本城の石垣変遷」
『特別史跡熊本城跡総括報告書 調査研究編』第 2 分冊）
※熊本市熊本城調査研究センター HP に
　報告書ダウンロード可能リンク先あり



※本図は熊本市 2020 掲載図をその後の詳細調査成果に基づいて修正（令和 3 年度末現在）

■熊本城（新城）天守の歴史

慶長 4 年（1599）　茶臼山（ちゃうすやま）山頂付近に新城の築城着手
慶長 5 年（1600）　天守（大天守）完成
慶長12年（1607）　新城が完成し「隈本」を「熊本」に改称
慶長16～元和年間（1611～1624）　小天守・大天守附櫓（つけやぐら）を増築
明治10年（1877）　西南戦争開戦直前に大小天守・附櫓焼失
明治22年（1889）　熊本地震で石垣崩落、変状
昭和35年（1960）　鉄骨鉄筋コンクリート造の天守再建
平成28年（2016）　熊本地震
　　大小天守穴蔵（あなぐら）石垣が崩落
　　大小天守台外面石垣も一部崩落、変状
平成29年（2017）　天守閣と石垣の本格復旧着手
令和元年（2020）6 月　石垣復旧完了
令和 3 年（2021）3 月　天守閣復旧完了

■大天守石垣の特徴

天守閣の建物下には、大天守・小天守・大天守附櫓の石垣が現存しています。これらは石垣の特徴から、大天守石垣と小天守・大天守附櫓石垣に大別できます。

本紙紹介の大天守石垣の特徴は、築石部は目地（つきいし）が通らず・方形ではない加工度の低い石材が使用され、隅角部（ぐうかくぶ）は重箱積（じゅうばこづ）みです。

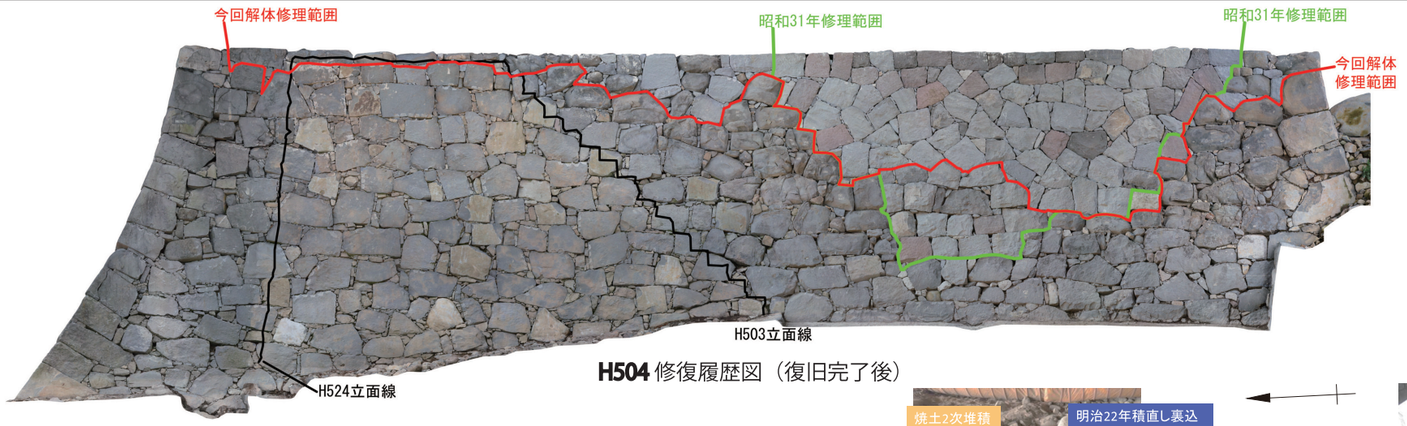
こうした石垣は、大天守台を中心に本丸上段（じょうだん）・平左衛門（へいざえもん）丸・飯田（いいだ）丸のみに分布していることがわかっており、加藤清正の新城築城時の石垣です（熊本城石垣 2 期）。

大天守穴蔵石垣崩落状況

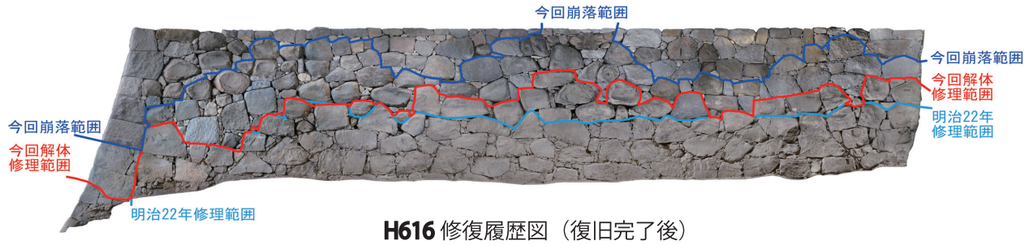
大小天守石垣被害状況（東北東から）

大小天守石垣復旧完了状況（東北東から）

熊本城解体新書 その 3　天守閣下石垣復旧に伴う調査成果　大天守石垣 編
熊本市文化市民局 熊本城総合事務所 熊本城調査研究センター 096-355-2327　令和 5 年（2023 年）4 月 第 2 版 第 1 刷発行



H504 修復履歴図（復旧完了後）



H616 修復履歴図（復旧完了後）

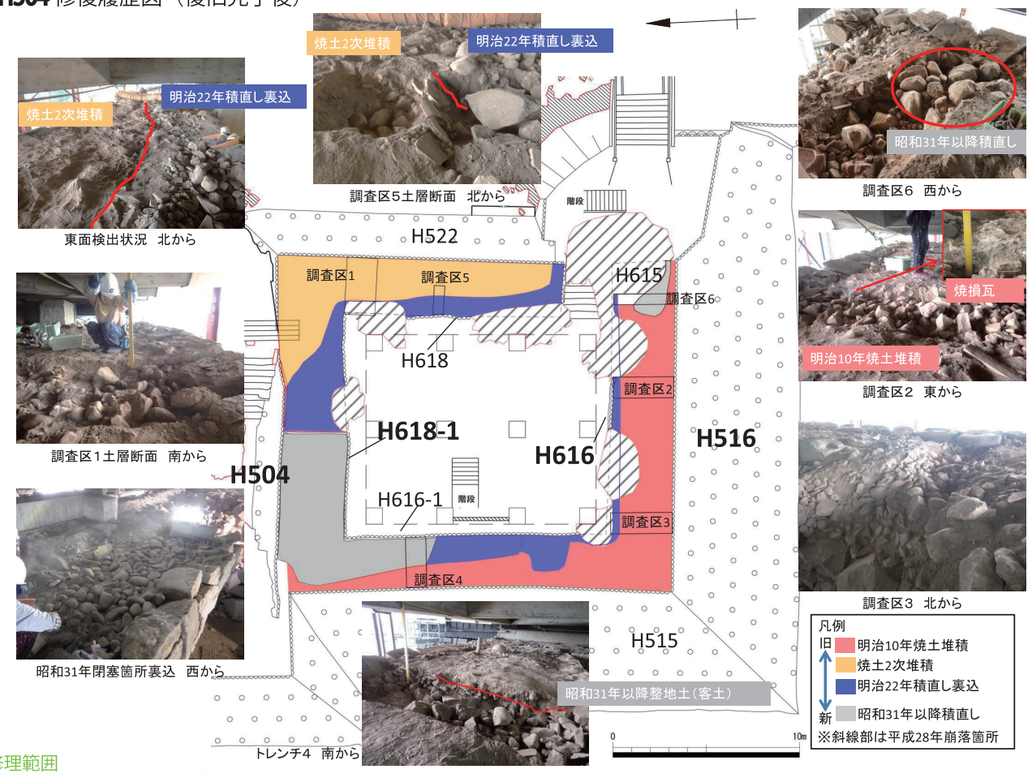
小天守石垣 H503・H524 を解体修理した際に、昭和 35 年天守再建に伴う積み直し時以来、60 年ぶりに大天守北面の埋没石垣【H524 立面線～ H503 立面線】を確認しました。

◆大天守石垣復旧と修理履歴

大天守石垣の復旧は、平成 29 年 2 月の崩落石材回収から開始しました。崩落した大天守穴蔵石垣は昭和 35 年天守再建工事写真などを参考に今回の地震前の石材位置を検討しました。積み直しに必要な検討をすべて終えた平成 30 年 7 月 23 日に被災後最初の 1 石目を積み直しました。11 月末には大天守石垣の積み直しが完了しました。

今回の石垣復旧で積み直した石材は大天守で 791 石を数えました。

大天守穴蔵石垣のほとんどは明治 22 年熊本地震で被災後に修理されていました。さらに、大天守北面は、明治期に大日本帝国陸軍によって通路として開削された箇所を昭和 31 年の天守再建に先立ち、積み直して閉塞（へいそく）していました。



大天守石垣上面調査成果平面図

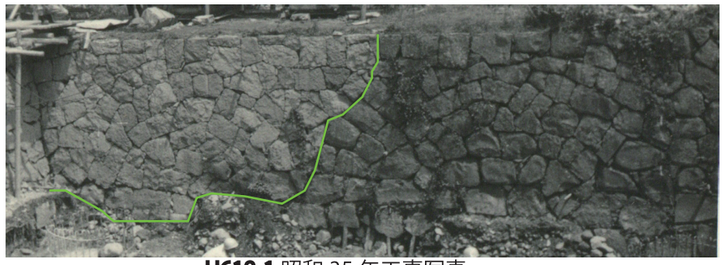
通路東側面石垣
築石部は間知石状の石材を用いて、落し積みで隅角部は算木積みです。

H504 焼損石材
明治 10 年（1877）西南戦争直前の火災の影響で石材がもろくなり、玉ねぎ状に剥離しています。

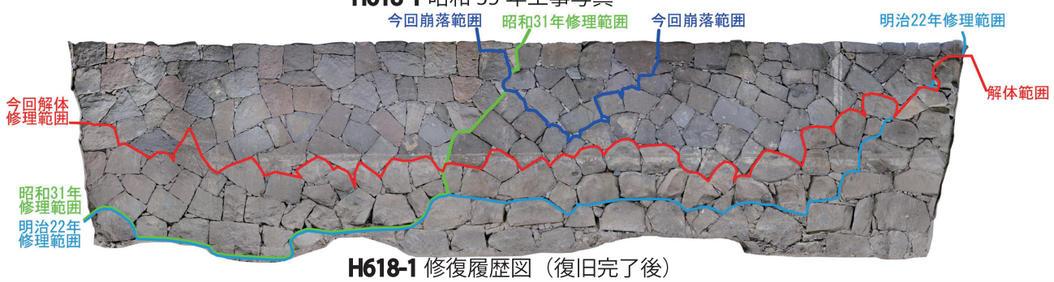
◆大天守石垣解体調査成果

南面～西面の大天守外側石垣際（ぎわ）には、明治 10 年（1877）の西南戦争で天守が焼失した際の焼土が残存し、その下には熱を受けた栗石（くりいし）を確認しました。江戸期の裏込（うらこめ）めは拳大（こぶしだい）～人頭大（じんとうだい）の円礫（えんれき）が使用されていました。

さらに、南面～西面南側にかけては、明治 22 年熊本地震で崩落・変状した石垣修理範囲を確認しました。明治 22 年積み直し範囲の裏込めには円礫に加えて、角礫（かくれき）・旧築石（つきいし）・大量の瓦や土が含まれていました。昭和 31 年修理範囲の裏込め内では通路として使われていた時の側面（そくめん）石垣を確認しています。



H618-1 昭和 35 年工事写真



H618-1 修復履歴図（復旧完了後）

H516 修復履歴図（復旧完了後）

熊本城跡は文化財保護法で国の特別史跡（建造物・美術工芸品などの文化財指定「国宝」と同じ意味）に指定されています。
先人が築いた状態のままを後世に伝えることを目的に指定されているため、現状保存が原則となります。しかし、遺跡（熊本城跡）を現状のままで後世に伝えることが難しい場合などは、きちんとした調査を実施した上で修理が行われます。
上下が黒帯の本パンフレットは、唯一無二の歴史的証拠をやむを得ず解体した際の調査成果を、より多くの皆さんに手軽にお伝えし、特別史跡熊本城跡としての価値をさらに高めることを目的としたものです。